

日中両国における指示詞の研究：〈コ・ソ〉系と 〈這・那〉系の対照を中心として

張, 瓊玲
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10454>

出版情報：文献探究. 17, pp.23-32, 1986-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

日中兩國における指示詞の研究

—ヘコ・ソ—系とへ這 那—系の対照を中心として—

張瓊玲

である。

(指示内容)

名詞的

物：これ || 這

それ || 那

あれ || 那

所：ここ || 這裡

そこ || 那裡

あそこ || 那裡

方面：こちら

こちら

あちら

こっち || 這邊

そっち || 那邊

あっち || 那邊

連体詞的

関係：この || 這個

その || 那個

あの || 那個

情態：こんな || 這樣的

そんな || 那樣的

あんな || 那樣的

副詞的

情態：こう

そう

ああ

えなに || 這樣地

そなに || 那樣地

あなに || 那樣地

(注：表示の仕方は、時枚誠記『日本文法』口語篇による。)

ところで、中国語の指示詞は、一般にへ這・那への二通りの区別を有する。しかし、すべての中国語がそうとは限らず、三通り又は四通りの区別を持つ方言もある。例えば、高砂族言語(注2)や蘇州方言(注3)、客家方言などは、三つあるいは四つの区別が見られるようである。本稿では、現代日本語とへ這・那への二通りの区別を持つ現代中国北京官話の指示詞を中心として、比較・対照を試みたいと思う。両国語間のずれを検討することによって、二つの言語の性格の違いにまで触れたいと考える。日本語或は中国語の学習研究者にとって、少しでも役立つことがあれば、幸いである。紙幅の都合上、本稿では、いわゆる不定指示詞へド系とへ哪系を考察の対象から除いた。それらについては、また稿を改めて考察することにした。

既に述べたとおり、日本語では指示詞の体系はへコソアへの三系であるのに対し、中国語(現代北京官話)を指す。以下同じ)ではへ這那への二つしかない。両体系を対照してみると、おおむね次の如く

右に示した通り、日本語のへコソ系は中国語のへ這への系に訳されるが、へソ・アソ両系はへ那への系にしか訳されない。それゆえ、中国人の日本語学習者にとってへソ・アソ両系の使い分けは困難であり、間違いが屡々見られる。

しかし、両国語の指示詞の対照におよび、へソソ系とへアソ系の使い分けよりも一層興味深いのは、へコソソ系とへ這・那への系の対応及びずれである。一般に、日本語のへコソソ系はへ這への系に

ソソ系にはハソソ系が対応すると考えられている。筆者は有吉佐知子氏の「地唄」という作品を翻訳したが、その際、日中両国語における文構造・表現構造などの相異点及び相異点が多く見つかった。その中、特に指示詞のハソソ系が、ハソソ系に限らず多くハソソ系にも訳されることに気づいた。日本語のハソソ系・ハソソ系をそれぞれすべてハソソ系とハソソ系に訳してしまうのは果たして適当であろうか。筆者はここにその疑問を提出して、考察してみたいと思う。

二

最初に、「地唄」における指示詞を見てみよう。実際の用例とその訳文をすべてとり出し、ハソソ系とハソソ系とに分けて検討してみる。

まず、ハソソ系に属する用例は6例あり、すべてハソソ系に訳すことができた。例文を示すと、

(1)、小型のスーツケースが二つ。旅立ちに、身の廻りの手荷物夫婦でこればかりである。

小型的箱子二個。出發時、夫婦兩人隨身攜帶の手提行李只有這些。

他の用例についても、すべてハソソ系はハソソ系に訳すことが出来るようである。

次に、ハソソ系とその訳文をみると、意外なことに次の三つのグループに分けられる。

(I)、ハソソ系がハソソ系に訳されるもの。

(II)、ハソソ系がハソソ系或はハソソ系両方に訳されるもの(注：よく考慮すればするほど、ハソソ系よりもハソソ系に訳される方が

流暢・自然)。

(III)、ハソソ系がハソソ系に訳されるもの。それだけ例文を挙げる。

(I) (2)、「緑よ。ほら、この音」……

「緑か。ふん、そやな、お前に似合うやろ」

その時の会話を、邦枝は懐かしく思い出していた。

邦枝懐念地回想起那時的對話。

(3)、今朝来た女子大生は、明日また来るだろうか。意味もなく、そんなことを考えたりした。

今天早上來的那個女大學生，明天會再來嗎？毫無意義地突然想起那件事。

(II) (4)、来月アメリカへ発つのだということも、多分父は知らないのではなからうか。それもよし、知らせずにするめば、いっそ黙って行ってしまうおう。

……這樣(又は那樣)也好、……

(5)、ピアノは譜の通りに弾けば、一応の音が出て音楽らしくなりますのに、三味線は譜ではんで曲になりません。それが私には魅力なんです。

鋼琴只要照著譜彈，能彈出大致的音而懷音樂。可是三味線光是譜是根本不能成曲。這(又は那)是町域有魅力的地方。

(6)、「お膝にさわる」といけませんから、一寸お待ち下さいませるか。係の人に特別に頼んでみましょう」

「いや、それは不可ん」

「身體被碰到了可不行啊！請等一下，我去向辦事員特別拜託看看」

「不要、這樣(又は那樣)不行」

(III) (7)、芸術院会員であり、最近は無形文化財の榮譽を受けた菊沢久翁は、大衆の中でも大立物だから、無論今日のプログラムで

……

……

は喜利に近く出演する予定で、従つて日の高いうちに楽屋入りする筈もないのであつたが、邦枝はそれを承知でいながら、どつしても待たずにはいられないのだ。

是芸術院会員且最近得到「無形文化財」荣誉的菊澤壽久翁、在權威者之中也是大牌人物、所以在今天的節目自當然是被安排在最「近尾聲」。因此不可能在太陽高照時便來到後台。邦枝雖然了解這點、但是無法不尊敬進去。

(8)、今日の会が邦枝には一心日本で最後の舞台になる。出来れば今日弾く琴の音を父の耳に、入れておきたい。そういう希いがあつた。

今天的表演公對邦枝可說是在日本最後的一場舞台表演。儘可能地她想將今天彈的琴聲彈入父親的耳裡。邦枝有著這樣的願望。

(9)、やがてその部屋に琴屋が琴と運びこんできた。続いて見慣れた三味線鮑が届けられた。もうそんな時間になつたかと、邦枝は驚き、腕時計の針を確かめると空腹を感じたので部屋を出た。琴師將琴搬進這間房間來、然後服熟的三味線套子也跟著被送進來。已經到了這個時間了嗎?! 邦枝嚇一跳、一看手錶的指針確認時、便感到肚子餓了而走出房間。

(10)、「おとうさんに会つた?」

「会つたわ。でも、話は出来なかつたの」

そのことに譲治はそれきり融れなかつた。

「見到父親了嗎?」 「見到了。但是沒能說話。」

這件事讓治也只有悶到死。

(11)、進出されても、邦枝は菊澤壽久と離れ得ず狼狽を続けてゐるものと思ひこんでいたのであつた。その自惚れが無慚に粉砕されてゐた。

菊澤壽久深信那被趕走後一直很狼狽、還是離不開他。但是、

這種自負却萬情地被粉碎了。

(12)、娘の先生は才能があるというがお世辭かもしれないが、それを真に受けて道を誤らせたくないこと。

女兒的師父說她有才能、但或許是誇獎的話。我不想因為真正地接受這個而使她誤入歧路。

このようにして「地唄」におけるすべての指示詞とその中国語訳と対照してみると、△表1▽を得ることが出来る。

△表1▽

計	ア系	ソ系	コ系	日中
24	0	17	7	這
6	0	6	0	這・那
7	2	5	0	那
37	2	28	7	計

右表より、次のようなことが言える。

1、△表1系は殆ど△這系に訳される。

2、△ア系は殆ど△那系に訳される。

3、「地唄」における指示詞の中、△ソ系が77%を占める。井手至氏(註)により、現代日本語文における指示詞は、△ソ系が△ア系より多く用いられる傾向があると言われてゐるが、この作品においても同様である。又、一般に日本語の文章・論文では△ア系

の例は非常に数が限られているが、この場合も同じである。

4、原文に△ソ系は28例あるが、△ア系に訳されるのは5例(いづれにも訳せるものを入れる)と11例。以下同様。(しかなないのに対し、△這系に訳されるものはそれより多く、17例(又は23例)ある。極めて不思議だと思われる。中国語について言えば、

この数字は、中国現代文における指示詞は少なくとも二倍の比率で「這」系が「那」系より多用されるという望月八十吉氏の指摘を裏づける。

以上の「地唄」の例はすべて筆者の翻訳であるから、個人的・主観的の恐れがあるかも知れない。また用例も充分でないと思われるので、さらに他の訳者の手になるいくつかの作品を選んでその用例を見てみる。

とりあげたのは、芥川龍之介の「羅生門」・「六の宮の姫君」・「秋」・「お富の貞操」の四篇である（『昭和文学全集 芥川龍之介集』角川書店一九五三による）。中国語訳は黄恒正氏訳『復仇的
故事』・『假面具』（長橋出版社）による。

これらの作品の指示詞についてすべての用例を整理してみると、次のようである。

△表2▽

ソ 系				コ 系				
その他	0	那 系	這 系	その他	0	那 系	這 系	
6	16	13	9	11	5	0	30	羅 生 門
4 4				4 6				9 0
3	15	9	11	4	5	0	10	六の宮の姫君
3 8				1 9				5 7
12	22	18	23	1	8	0	22	秋
7 5				3 1				1 0 6
13	20	18	18	1	9	0	21	お富の貞操
6 9				3 1				1 0 0

△表2▽より、これらの作品においても先に述べた1→4の傾向を見てとることが出来る。

三

次に、これまでとは逆に、中国語の指示詞がどのように日本語に訳されるかを見てみよう。その手がかりとして、ここでは、台湾の作家曾心儀氏の小説「彩鳳的心願」の中の子供の指示詞をとり出して、その日本語訳文と対照してみた。彩鳳的心願の原作は台湾の遠景出版社刊（一九七八）。日本語訳は林正子氏・中村ふじゑ氏訳「彩鳳の夢」『台湾現代小説選』エム（研文出版・一九八四）によるものである。

「彩鳳的心願」中の「這」系・「那」系が日本語にどのように訳されているかを示すと、△表3▽と△表4▽の如くである。

△表3▽

0	ア	ソ				コ				日 中	
		あんなの	なん	その	その	この	この	この	これ		
3					/				5	這(主語)	
					/					這(述語)	
6		/		2				12		這+名詞	
6	/							/ 3		這+数詞	
2		/						4		這 個	
3	/		/					2		這 些	
7		/				3(2)			2	這 様	
2						2(4)				這 麼	
2						2			/	這 種	
2							//	/	/	這 裡	
33	2	3		3		2	13	12	21	4 5	計
6	/			/							那+名詞
1	/		/								那+数詞
4	1(2)										那 些
1			/								那 様
1	(2)(1)										那 麼
1											那 裡
14	7	/		2	/						計

へ表4

語数 (%)	その他	0	ア系	ソ系	コ系	日中
103	5	33	2	8	55	這系
79・2						
27	2	14	7	4	0	那系
20・8						
130	7	47	9	12	55	計
100						

右の二表によると、次のような傾向が見られる。

1、原文ではへ那V系よりもへ這V系の方が遙かに多く、1対4の比率である。これも二節の4に述べたように中国語の文章にへ這V系が多用される点と合致する。

2、へ表4Vの各件内の割合をみると、へ這V系は半数以上がへコV系に訳され、三分の一が日本語に訳されていない。へソV系・へアV系またはその他に訳されるのがわずかな数例である。

へ那V系は半数以上が訳されておらず、へソV系よりもへアV系に訳されたものの方がやや多い。

3、中国語のへ這V系・へ那V系いずれも30%以上が日本語指示詞に訳されず、特にへ那V系は訳されない例が半数以上もある。

4、場所の指示詞は用例が少ないが、少なくともへ這V系は規則通り殆どへコV系に訳されている。

3についてさらに詳しく見てみると、へ這V系・へ那V系は日本語に訳されないものがそれぞれ33例と14例ある。その中、へ這V系では「這麼」の3例及び「這樣」の7例(計10例)、へ那V系では「那麼」の2例及び「那些」の4例が殆ど「くさいな」「くよ

うな」のように訳されている。例えば次の通り。

- a、像我這樣姿色平平有什麼美。(わたしみたいなのを、ちっともきれいとは思わないわよ)
- a'、像我姿色平平有什麼美。
- b、像章副總這樣的人！(章副支配人みたいな人...)
- b'、像章副總的人...:
- c、買了唱片，懷抱在胸前，那樣珍惜它。(買ったレコードは大事そうに胸にだきしめられている)
- c'、買了唱片，懷抱在胸前，珍惜它。

(注：a'・b'・c'は不自然なもの。)

これらの例文でへ這V或はへ那Vが省略されると、言語直観にそぐわない不自然なものに感じられる。この点は、明らかに、中国語の指示詞と日本語の指示詞の異なるところである。

又、中国語の指示詞の中、次のような普通は日本語に訳さないものがあるのも、中国語指示詞の特徴的な面である。例えば、

- a、張華這個人(張華という人)
- b、他門這些年青人(彼ら若人)
- c、昨天來的那個人(昨日きた人)

中国語の指示詞は、指示の働きほかに二つの名詞をつなぐ作用が潜在的にある。それに対し、日本語の指示詞はそのような働きが見られないようである。両者のこの違いはもはや構文上の問題と思われる。

四

以上、へコ・ソ・アVの中国語訳とへ這・那Vの日本語訳の実態について述べてきた。この節では、問題とやらにしばってへ這V系とへソV系との関係に重点を置いて反省・考察し、諸家の説等も合

わせ考えたいと思う。

例えば、二節の(Ⅳ)の例文では、先行叙述内容との対応において、ソレ系が多く見られる。作者が登場人物の行動・ありさまについて冷静・客観的に物語っていると言うことができる。

(Ⅳ)の例(9)「その部屋……運びこんできた」の場合、作者は平靜に主人公のいる部屋(作者のいる部屋ではない)を話題にしたので、「その」を用いるが、中国語訳文では「作者が今まで述べてきた部屋」という指し示し方をする。今現在話題にしている部屋を指すのである。又、「運びこんできた」という動詞もある。「来・くる」という動詞は求心的動作を表わすが、(9)の例のように、日本語では「ソレ系」とも使うことができる。一方中国語では、求心的動作には「這」系が使えない。中国語では「搬進那間房間來」は非文法的である。つまり、中国語では「來這兒」はあくまでも求心的であり、「去那兒」は非求心的であって、指示詞と動詞の示す方向性と一致しなければならぬ。それゆえ、筆者は(9)の例文を「這間房間」と訳した。又、同じ例文中の「もうそんな時間になつたか」では、作者は冷靜に流れ来た「時間」ととりあげる。しかし、中国語訳文では、「已經到了這個時間了嗎？」と「這」を使った訳になっている。琴が運び込まれて来る瞬間と邦枝が我に帰る瞬間とは一続きの、殆ど同時と言つてよいくらいの出発事である。邦枝は届けられた琴・三味線などを見た瞬間、「ああ、もう(楽器が届けられるような)現在のこの時間になつたか」と思うのである。従つて、「這」としか訳されない。(Ⅳ)のような例は多い。日本語では既に述べたことを指す場合、それらのもの・或はことについて、冷靜・客観的に物語るといふニアンスをもつ。それに対し、中国語の場合には先に話題にした事柄は一連の話題の一部分にしかすぎず、当然、話の流れとして過去よりも現在の、目の前に見えることを中心にし

て表わす。日本語のように、前文の内容を受けて話を続けるということはない。このような場合、中国語では「這」系を使うのが普通である。

中国語原文からの日本語訳の場合を見てみよう。「彩鳳的心願」の中の例「這兒不道德、但是多少人往這裡跑、多少人從這兒爬上往高處的階梯、這些人不都是過得好好的、過得舒舒服服。」(ここは不道德なところなのかしら。だけい、どれだけの人がここへ駆けこみ、ここからさうに高いところへのぼる階段をかけたあがつていったことだろう。その人たちは、みんながみんな楽な、よい暮らしをしてゐるわけがないにしても)において、たった今物語ったばかりの人たちを指示するので、中国語では「這些人」となる。しかし、日本語訳文では、一種の同想的な気持ちで述べられた部分であり、語る内容と作者との間には距離感があつて、「その人たち」と訳されている。

次のような対話の用例の場合、**「還好我沒有生得好姿色、不然可沒有這麼清靜的日子過。」**(私器量よしに生まれてこなくてよかった。でなければ、こんな静かな生活はできなかったもの)と言つた雅容の言葉に対し、**彩鳳は「雅容、你怎麼這樣說呢？」**(どうして、そんなこというの。…)と応答する。これも日本語では、彩鳳が相手(雅容である)の発言内容を相手の勢力圏内にあるものとして把握するので「そんなこというの」と訳されたと解釈できる。中国語原文では、彩鳳が雅容の言つた内容を強調して「這樣」と使っていると思われる。

強調の働きについて、さらに例をあげると、**「我母々假生意、帶和客戶到夜總會應酬。他說：歐陽××剛出來嗚呼……好像不太正常。正在這時候，給日本人挖強、帶到日本去訓練……」**(わたしの兄さんは着花をしてゐるから、いつもお

とくいさんを連れてナイトクラブへ行くのよ。その兄さんにいわせるよ、欧陽メメは歌いはじめは中央酒店の専属でばかみたんなかっこうで人形が着るようなヒラヒラのスカートをはいて、それからだらしないくなって、とてもまともでなかったやうよ。ちゅうぶ
そのとき日本人にスカウトされ、日本で訓練されて……)

の場合、作中人物である話者は、過去の出来事を話題にしてゐるのだが、へんをばらして出来事の生じた時を限定・強調する。「正在」は「ちゅうぶ……」している」という意味であり、強調のニアンスをもつ。「正在」を付けて強調しようとする、「那」では強調の働きが弱く、むしろ不自然にさへ感じられる。やはり、「這」を付けることによって強調の範囲を限定し、それによって強調の働きを強めるのである。このような場合、日本語では「そのとき」と訳すのが自然であり、話者と過去の出来事との間には一定の距離がある。
以上のような日本語文に見られるヘソソ系について、井手至氏は論文・小説或は会話等の文章において、既に表現された先行の叙述内容或は相手の発言内容は、聞き手の諒解したものととして、聞き手にある話材が意識され、把握されるために、ヘソソ系で指示されると述べておられる。

日本語の指示詞の用法に関しては、佐久間鼎氏以来、さまざまな議論がなされてゐる。

佐久間氏は、「これ」は話し手の勢力圏内にあるものを指すのに対し、「それ」は話し相手の勢力圏内にあるものを指すと説かれ、眼前の事象をさして「コ系」を用いるのに対し、話された事件などで、現に相手との間に話題になつてゐる場合には「ソ系」で指すのが普通・自然だつと述べておられる。

一方、堀口和吉氏はコソアの三つの表現性のちがいは、親近・疏遠ということであり、コ系は熱い強烈な自己顕示の指示であるのに

対し、ソ系は冷たい平静な自己抑判の指示であると主張される。
日本語の指示詞については他に久野暉氏、高橋太郎氏、岡村和正氏等の論稿に詳しいので、参照されたいが、最後に、筆者の考えに近い説として、正保南氏のお説を紹介する。氏は、ヘソソ系に対して次のような結論を提出された。

「ソ」は「コ」によつても、「コ」によつても指示し得ないものの指示を行なうばかりでなく、「コ」か「ソ」で指示しうる条件が揃つていても、客観的で冷静な指示を装う時には、この指示の方も引き受けるという具合で、幅広く活動を行なう語であるが、(以下略)

以上の考察、及び諸先学の説を合わせ考えると、日本語では、既に物語った事物を指示するのにヘソソ系を用いる場合、話し手とその話した内容との間には一定の距離があり、冷静・客観的に物語るためにヘソソ系を用いると考えられる。それに対し、ヘソソ系は話し手の勢力圏内のことを指し示すのがその本質であるので、話し手がヘソソ系を用いることによって、感情移入を行なうような主観的な色彩がある。日本語のヘソソ系に対しては中国語のへんをばらと当てて翻訳する場合が多かつたが、中国語の指示詞の場合、それ程冷静・客観的な表現はできず、むしろ今述べたばかりのことを目の前にあるように示すため、なお一層強調するようにへんをばらと用いると考えられる。

五.

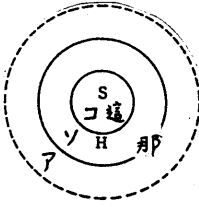
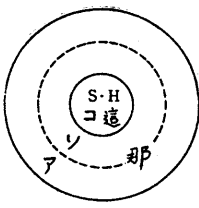
前節でも触れた通り佐久間氏以来、コソア指示詞がそれぞれ近称・中称・遠称を示すという説は多くの学者によつて支持されているが、ただ、三上章氏は、それを(1)コレ対ソレ、(2)コレ(ソレ)を吸収(対)アレというように二通りの対立として見るべきことを主張され、ソ

レ対コレとアレ対コレとは異時的であり、異質的であると述べておられる。この説は、日本語の指示詞を中国語の「這・那」の対立と対照して考える場合、都合がよいと思われる。即ち、コレ対ソレ或はコレ対アレの対立はそのまま這対那であると考えることができる。同知のとおり、指示詞には状況・用法によって、現場指示と文脈指示の二種がある。現場指示に関しては、正保勇氏(注1)が次のような簡明な結論を出しておられ、中国語もほぼ日本語の場合に於いて解釈できるように思う。

融 合 型	対 立 型
コ それに對する「われわれ」の関心が強 いもので、近くにある人／物	話し手が、自分のなわばりに あると認定した人／物
ソ 「ア」が指すには近過ぎるもの、若 しくは、話し手と聞き手の孰れか 一方或は両者の視野にないもの	話し手が聞き手のなわばりに 屬するものとして認定し た人／物
ア それに對する「われわれ」の関心が 強いもので、遠くにあるもの	話し手が、「自分」の領域に も、「相手」の領域にも屬す ないと考えたもの

正保氏の示された図を利用して日本語と中国語とを比較・対照してみると、次の如くである。

融 合 型 SとHのなわばりが重なる場合
対 立 型 SとHのなわばりが対立する場合
S||話者 H||聴者



(注：破線は境界が明確に設定できないことを意味する。)

中国語の現場指示は極めて単純であり、話し手を中心として、しかもそれを唯一の中心として構成される。即ち、話し手のなわばり或は話し手に近いものを指すのが「這」系であり、この「這」系以外の領域にあるものを指す場合はすべて「那」系である。従って「這」系は「這」よりも範囲が広い。日中両国語における現場指示詞は、「コレ」系対「ソレ」系イコール「這」系対「那」系というように、おおむね一致している。従って、翻訳上は余り問題にならない。問題になるのはもう一方の文脈指示の場合である。



文脈指示の場合、両国語を比較して図示すると、次の如くである。
(注：実線は日本語から中国語への翻訳。虚線は中国語から日本語への翻訳。)

右図の中へソレ系が「那」系と対応するだけでなく、「這」系と対応する場合も多いという現象を生ずる理由としては、次のようなことが考えられる——
一般に、話し手或は書き手にとっては、近称とするか中称とするか、それはその場の感情的なものによって直観的に決定されることが多いと言える。日本語の文章では、先行叙述内容について目の前にあるように強調したい、または主観的な感情を移入したい場合には、「コレ」系を用いる。それ以外、多くの場合は、平靜に物事を語ろうとして「ソレ」系を用いる傾向が著しい。一方、中国語の文章では、指示詞によって心理的距離を表現したり客観的に述べたりするよりも、むしろ話し手がその話の内容を現実に見えるように述べ話題にするので「這」系を多く用いる。それに対して、「那」系は実際に一定の距離がある場合或は一定の時間(例えば「去年」「前天」)を指す場合に多く用いられると思われる。

従って、ヘソ系とハソ系或はヘソ系とハソ系とは、全く異なるというのではなく、西国語の間には指示詞に対する観念や要求の違いもあると思われる。整理してみれば次のようである。

文脈	現場指示の働きから、基本的には、目の前にいまいまと述べるような場合或は感情を入れた場合に用いられる（明言・コ定）。	普通左記以外の場合に用いる。
	普通右記以外の場合に用いる。	基本的には具体的に一定の距離或は一定の時間を指す場合に用いられる。
指示	ヘソ系	ハソ系

中国語は比較的現場主義であり、日本語は現場よりも一歩離れて、平静・客観的に物語るようである。

なお、先述内容の指不に関して次のような調査結果も得ることができた。前述の如く、先述内容を指不すると、日本語の場合には多くヘソ系、中国語の場合には多くハソ系を用いる傾向のあることがここでも裏付けられている（3・4の質問文を比較してみたい）。

1、あなたはこういった。「……」	○	○	(注：○は言う、 ×は言わない。)
2、あなたは「……」	×	×	
3、「……」	△	○	△は余り 言わない)
4、「……」	○	△	

六

日本語の指不詞ヘソ系と中国語のハソ系に重点を置いて述べてきたが、以上の考察によって文脈指不やその他の表現法における両国語間の違いがある程度明らかになったと思う。先述内容を指す場合は、中国語では多くハソ系、日本語では多くヘソ系を用いる。このことは、総体的に見れば中国語の文章の方が主観的、つまり話者中心に文章が展開していくのに対し、日本語の文章の方が客観的、つまり話者と叙述内容の距離を或る程度保って話を進める傾向があることを意味すると思われる。

先に現場指不について、全体として中国語の用法と日本語のそれとが合致していると述べたが、次のような相違点もある。例えば、話し手にとって、未知の人が聞き手のそばにいるとしよう。この時、日本語では話し手が「その方はどなたですか」とたずねることが可能である。しかし、中国語では「這位先生」のようにハソ系を使い、ヘソ系を使うことはできない。さらに中国語では、向かい合った未知の相手に対して「這位先生、請問您貴姓？」、「這位先生、請問現在幾點？」とハソ系がたずねることでもある。（但し、「這位」はなくてもよいが、これがあることより丁寧に感じる。）

このような、第三者または聞き手を指す場合に日本語がヘソ系であるのに対し、中国語がハソ系を用いる傾向について考察を進めていくと、最終的には敬語の問題ともからんで来ようである。今後なお一層の検討が必要と思われる。

注

注1：『現代日本語の表現と語法』くろしお出版（558）復刊

注2：注1に同じ。一八ページ。

注3：李小凡氏「蘇州方言的指示詞」『語言學論叢』第13輯（1984）

注4：「關於漢藏語系空間指示詞的幾個問題」『均社論叢』第13号（1983）

注5：新潮文庫 S51 第十四刷による。

注6：「文脈指示語と文章」『國語國文』第21卷第8号（S27）

注7：『中國語と日本語』『光生館』

注8：「代名詞」『純日本文法講座』1『明治書院』

注9：「指示語」『コソア考』『論集』日本文学・日本語5

現代 角川書店

注10：『日本文法研究』大修館

注11：「コソアの指示領域について」『国立国語研究所研究報告集』131（S57）

「コソア」と「場」『国語国文』25卷9号（S31）

注12：「代名詞とは何か」『品詞別日本文法講座』2『明治書院』

注13：「コソア」の体系『日本語の指示詞』『国立国語研究所』

注14：「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版

注15：『現代語法新説』刀江書院

注16：注13に同じ。

注17：田村マリ子氏によれば、この場合韓国語では「이분（二人の方）」と用いるとのことである。（「指示詞——朝鮮語の」

ユ・対系列と日本語コソア系列との対照——」待兼山

論叢12（1978）

〔補注〕

表2・表4でその他に入れたものの中には次のような訳し方があ
る。日中両国語の翻訳に携わる者にとって参考になると思われるの
で、最後に挙げておく。

- 1. その人の顔 → 他的臉
- 2. この女 → 她
- 3. この頃 → 最近
- 4. この年 → 今年
- 5. その日 → 當天
- 6. その翌日 → 第二天
- 7. 例の運搬係の藪さん → 那位送貨員藪先生
- 8. お相手をする → ↑ 陪這位先生

九州大学大学院博士課程